

昔話「桃太郎」の再話における表象戦略

—講談社の絵本から占領期の絵本まで—

首藤 美香子*

1. 昔話「桃太郎」の再話の歴史

日本五大昔話のひとつ「桃太郎」の成立は室町末期で、文献としては江戸初期の絵巻物が最も早い。今日よく知られる、「桃から誕生した男児が犬・猿・雉を伴に鬼が島へ鬼退治に行き宝を得て凱旋する話」は、江戸末期から明治初期に一つの形式として定着したものにすぎず、異類誕生譚に「御曹子島渡」等の民間説話、中国の西王母伝説と陰陽五行論が結びついたといわれる。日本各地にはこれに類する様々な口頭伝承が多く残されているほか、「桃太郎」は時代の変容に応じて新たな意味や解釈が加えられ、設定、登場人物、構成や挿絵など表現を変えた再話が限りなく創造されてきた¹。特別な出自を持つ子どもが成長し、他に比類なき力を発揮して手柄をたて、家に富と福をもたらす、という単純でわかりやすい枠組みは大きく揺らぐことなく、歴史による変形がなされてきたのである。

「桃太郎」の再話の典型例を挙げてみよう。明治中期以降、「読み書き」の初学教材として国語の教科書に採用されると、江戸期に主流であった川上から流れてきた桃を食べた婆が若返り妊娠する「回春型」から、桃から赤ん坊が誕生する「果生型」へと移行し、結末の「嫁取り」の逸話が割愛された。その理由は教育的観点から子どもに配慮し性的隠喩が回避されたためといわれる²。また江戸の赤本では、「怪童」桃太郎が権力の象徴ともいえる鬼を勇猛果敢に打倒する「門破り」の場面が人気を博したとされる。しかし、明治・大正期の絵本になると、桃太郎の破壊的な攻撃力を示す視覚表現が和らげられ、鬼の暴力性を示す描写が突出し、さらに脇役でしかなかった動物の鬼退治の協力者としての役割分担が明確にされる一方、桃太郎は統率者・指揮官として後景に退くという³。

「桃太郎」は、戦前まで一貫して国語の教科書に掲載され学校教育の場で広く浸透していくが、それに従い「子どもに読み聞かせるにふさわしい昔話」となることが求められた。その結果、低年齢の子どもでも理解できるよう平易な表現に改められ、桃太郎の言

*子ども学部子ども学科

SUTO Mikako : Comparative Analysis of Japanese Picture Books "MOMOTARO" Published from the Prewar-Period to the Occupation-Period, Focusing on the Representation Strategies in Retelling Folktale for Children

動が説得力を持つよう合理的な根拠や教訓、道徳が付与されるなど、子どもに理想の人間像を説く格好の題材とされていく。「桃太郎」の再話にみられる変容過程を歴史的に検証した滑川（1981）、鳥越（2004）、加原（2010）が注視したのは、現実の戦争を暗示させる「桃太郎」である⁴。特に日中・太平洋戦争期、国語の教科書、児童文学、唱歌、漫画、映画、演劇、新聞報道、メディアイベントなど子どもの生活文化のあらゆる面を包囲した「桃太郎」では、日本の象徴的存在として桃太郎を崇め、優秀で進取果敢な国民性を誇り、露骨な比喻で日本の脅威となる国を貶めて戦争の正義を説き、結末で約束される圧倒的な勝利を寿ぐための、いわゆる軍国主義思想を喧伝する手引書として巧みに利用された。その過去を否定的に捉える三者に共通するのは、残存する作品が軍国主義思想の影響下で国民教化の手段としてどのように転用されたか、当時の「桃太郎」解釈や背景に見られる政治的意図の分析に重きを置いている点と、戦時期の「桃太郎」を、民衆の素朴な願望が投影された昔話の伝統とも、戦後の民主主義下で再生された「桃太郎」とも、口頭伝承の豊饒な文化とも異なる次元にあると特別視することで、「桃太郎」の再話の歴史から戦時期の作品を分断させてしまっている点である。

さらに絵本・児童文学研究を主導してきた滑川、鳥越が、「桃太郎」の恣意的な解釈がもたらした結果に対する罪悪感ゆえに戦後しばらくは「桃太郎」の出版が自粛されたものだという憶測をしたが、占領期の「桃太郎」の所在が国内で確認できずにいたため、その説を裏付ける機会がなかったことから、研究者の間では長らく自粛説が信じられてきた。しかし、米軍の占領統治下にあった1945年から1949年までに日本で出版された印刷物のほとんどを所蔵するメリーランド大学カレッジパーク校プランゲ文庫の児童書に関する近年の書誌的調査により、「桃太郎」の絵本、読み物、漫画、紙芝居は戦後4年以内に多く出版されていたことが判明した。つまり、「桃太郎」は早々と復活していたのである。しかし、戦前の「桃太郎」が戦後そのままの形で出版されていたとは想像しがたく、新たな加工がなされたとも予想できる。だが、ここで真相を探る作業を急ぐ前に、占領期の出版物がなぜ米国で発見されたのか、その背景を確かめてみる必要がある。

2. 占領期における「桃太郎」の出版

（1）GHQ・SCAPによる言論統制

占領期とは、1945年8月14日のポツダム宣言受諾から1952年4月28日の対日平和条約発効までをいい、連合国の軍事占領・軍国主義勢力の一掃・日本軍の武装解除・戦争犯罪人の処罰・民主主義の徹底などを謳った同宣言に基づき、それらの目的が達成され平和的で責任ある政府が樹立されるまでという条件で、実質的には米国による統治がなされた期間をさす。このような米国主導の「非軍事化・民主化」政策は、治安維持法体制

の解体と、選挙権付与による婦人の解放・労働組合の結成奨励・学校教育の自由主義化・秘密検察など弾圧諸体制の廃止・経済機構の民主主義化の「五大改革」から具体的に出発する。ところが、マッカーサー率いる連合国軍最高司令官総司令部（以下GHQ・SCAPと略）は、このような国家再建に向けた重要な取り組みに先駆け、占領政策に反する言論を厳しく統制し、日本人に「戦争罪悪感」を浸透させるため、参謀第二部（G-2）所管下の民間検閲局（Civil Censorship Detachment 以下CCDと略）を設け、秘密裡に情報管理と世論操作を実施する決定を下していた。よって、民間におけるすべての通信報道活動（郵便、電話、電報、映画、放送、出版）は、1945年9月19日に発令された「プレスコード」（SCAPIN-33）に基づき、1949年11月までの約4年間、GHQ・SCAPの検閲下に置かれたのである⁵。

「プレスコード」では、「日本に出版の自由を確立するため」に「この出版法は、出版を制限するものではなく寧ろ日本の出版機関を教育し、出版の自由の責任と意義と、重要性とを示そうとするものである。従つて報導の真実性と宣伝の除去といふことに重点を置」くもので、具体的には「報導は嚴重に真実に基づかねばならない」「直接にせよ間接にせよ公安を防ぐる様な記事を掲載してはならない」「聯合國に就ての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない」「聯合國進駐軍に就いて破壊的批評や占領軍に対し不信、又は怨恨を招くような記事を掲載してはならない」などの違反項目が挙げられていたが、具体性に欠けたため現実の編集方針の変化に巧く対応できなかったという（下線引用者）。そこで混乱を避けるため、キーログと呼ばれる事例を簡潔に示した判断基準が検閲官に与えられ、例えば1946年11月25日発令の「削除または掲載発行禁止の対象」30項目では、「連合国軍最高司令官に対する批判」「検閲制度への言及」「合衆国への批判」「戦争擁護の宣伝」「神国日本の宣伝」「軍国主義の宣伝」「ナショナリズムの宣伝」などが処分の対象となっていたという⁶。

検閲期間中、出版社は出版予定の印刷物をCCDに2部ずつと検閲届（書名、著者名、出版社と住所、出版予定部数、頁、価格等）を提出することが義務づけられ、それに対し検閲官が表紙にジャンルと番号を割り振り、提出日、ローマ字タイトル、出版予定部数、用紙の種類を記入した後、「プレスコード」に抵触していないかどうかを判断した。事前検閲期間（1945年9月～1947年末）では、「パス」、「改変」、「部分削除」、「公表禁止」、「保留」の判断が、事後検閲期間（1947年～1949年10月31日）では「可」、「部分不可」、「全面不可」の判断がなされ、検閲の結果に関わらず提出した出版物の1部は出版社に返送され、残りの1部がCCDに保管された。戦前の内務省による検閲と異なるのは、出版社は改変削除に際して紙面にその痕跡を残すことを固く禁じられ、必ず版を再構成するよう求められた点である。このことが含意するものとは、GHQ・SCAPは一般の人々に対して検閲制度の存在とその実態を全く知らしめることなく言論統制を敷くことに成功し、出版社は違反を問われ版の再構成に要する時間や労力、経済的負担を斟酌し、

GHQ・SCAPによる政治的介入を極力回避するための自主規制をも余儀なくされたということである⁷。

(2) プランゲ文庫と児童書検閲

ところで、占領期に内密に行われていた検閲制度の廃止が1949年に決定しCCDが解体されるに至り、提出された出版物の歴史的価値を見抜いたGHQ・SCAPの歴史室長G・プランゲは、そのほとんどすべてを彼の勤務校メリーランド大学で所蔵するために奔走し、米国搬送した。これら大量の資料は1978年にプランゲ文庫と命名され、1992年からは日本側の協力で書誌的整理が進められる⁸。敗戦後の混乱期、物資が欠乏し物流が安定しない中で発行され品質も十分とはいえない出版物の多くが、破損や消滅の恐れを免れプランゲ文庫に当時のままの形態で保存・管理されていることは奇跡的ともいえる。特に児童書は家庭や社会で「消耗品」のように扱われる傾向にあり、子どもをひと時だけ喜ばせ楽しませる「玩具」や「手慰みのもの」と同様に処され、どれほど子どもから愛され必要とされたものであっても大人になるまで大切に保存されることは少なく、また人気の高い商品ほど子どもから子どもへと乱暴にぞんざいに手渡され残らないことが多いため、文庫の存在は非常に意義深い。

プランゲ文庫の資料構成は、図書・パンフレット71,000点、雑誌13,800点、新聞18,000点、報道写真10,000枚、地図640枚、ポスター90枚、集会配布物140点だが、なかでも児童書は8000点（1608点の絵本、2069点の漫画、4275点の読み物）と大きな割合を占める。これら児童書の書誌情報の整理は、いち早く村上・谷（2005）によって手がけられ、特に谷は占領期の児童書検閲の実態解明に精力的に取り組み、優れた成果を挙げている⁹。

さて「桃太郎」だが、プランゲ文庫から絵本29点（再版2点を含む）、読み物2点、漫画2点が発見された。谷（2006）の調査通り、「桃太郎」の絵本、読み物、漫画に対する直接的な検閲処分への痕跡は見られない。しかし、「桃太郎」を例文に採用した三尾砂『国語法文章論』が1947年10月1日の検閲で削除を指示され「アラビア夜話」への差し替えを余儀なくされた証拠資料があるほか、どの紙芝居が正確に特定できないものの「桃太郎」が「軍国主義的なテーマをベースにした日本の昔話」であることを理由に「違反」「右翼的宣伝」とする検閲文書が北海道に存在するという。この点について谷は、「桃太郎」にみられる検閲結果のばらつきは検閲制度が本来的に抱える矛盾が浮き彫りになったものであり、「検閲の基準自体が抽象的であり、検閲する個人の思想や教養に委ねざるを得ない面がある」とともに、「検閲は検閲する側の不利益になることを排除する側面」をもち「恣意的に行われる危険」を持つものだと指摘している¹⁰。

検閲制度の本質的な問題を突く見解だが、それでもなお疑問が残される。プランゲ文庫所蔵の昔話絵本では、「桃太郎」は「金太郎」の30冊に次いで2番目に多く出版され、かつ戦前に活躍した作家や画家も復帰しており、出版自粛説は覆される。では大藤（1980）

の見立て通り、児童文学関係者に贖罪意識はなかったといえるのか¹¹。占領期の「桃太郎」がどのようなものだったか知るためには、戦前との比較検証が改めて必要となる。そのためには、戦前の「桃太郎」を再話の歴史から分断してしまうのではなく、占領期の「桃太郎」に何が継承され、どこに新解釈が加えられ、検閲下で出版を果たすことができたのか、探究しなければならない。

(3) J.ダワー「桃太郎パラダイム」

この課題の解明に大きな示唆を与えてくれるのは、米国の日本史研究者J・ダワーの示した「桃太郎パラダイム」である。「桃太郎パラダイム」論が所収されている『容赦なき戦争—太平洋戦争における人種差別—』（1986）においてダワーは、戦時期に敵国人＝「他者」および自国人＝「自己」に対する認識がどのように編成されたか、日米双方の政府高官や軍指導部の発言、新聞・雑誌の論調、映画、漫画などのサブカルチャーから多角的に分析し、人種的偏見が戦争犯罪の根底にあることを論証する¹²。

当時、英米は日本人を「猿」や「未熟な子ども」と卑下したのに対し、日本は英米人を「鬼畜米英」「鬼」と誹謗していたのは確かだが、ここでダワーは「鬼」に対する日本人の認識が、偏狭で画一的で頑迷なものではないことを看破する。ダワーはまず、日本では「鬼」は元来単純な生き物ではなく、古代より伝統的な民族信仰の中では両義的な存在とみなされ、暴力や破壊と結びつく地獄の非道な拷問者であると同時に、征服して味方の陣営に引き入れることも可能で情け深い守護神の顔をもち、「悪事にも善い事にも使える能力を備えた多義的な見知らぬ人」とされた点を振り返る。そして、戦時期に日本人の教化と戦意高揚のために頻繁にメディアに登場する桃太郎と鬼の関係性が、確實不変の敵対構造ではなく、たとえば国定教科書には、桃太郎が戦闘で鬼の首領を打ち負かした後、改心し謝罪する鬼を放免してやる穏やかな結末が選ばれていることに目を向ける。さらに、終戦間際に海軍の後援によって制作された映画でも、かつて生得的に優れた「現人神」あるいは帝国の覇者として英雄視された桃太郎は、颯爽とした紅顔の若者へと「非神秘化」「人間化」を遂げる一方、「残虐」「極悪非道」と刻印されてきた鬼も、「憎むべき性向」を持ち「墮落してはいるが平凡な人間としての敵である白人」に変容し、共に人間として対峙するようになることを見出す。この桃太郎と鬼、即ち「自己」と「他者」の間に形成される特異な関係性と距離感を、ダワーは以下のように「桃太郎パラダイム」と名付けるのである。

英米に対する通俗的シンボルとして圧倒的に優勢だったのは、鬼の暴力的、邪悪な本性であった。しかし、宥められたり素直になったりする可能性は、常に潜在的にあった。そして戦時中の絵や漫画自体が数種の注目すべき変形を呈し、悪鬼のような敵が絶滅を逃れて征服され、愛想の良い鬼に変わりうることさえ示していた。

これら変形の一つは、有名な民話の主人公にちなんで「桃太郎パラダイム」と呼ぶことができる¹³。

ここで誤解してはならないのは、ダワーのいう「桃太郎パラダイム」とは大衆を戦争へと駆り立てるための有効な装置として「桃太郎」を祭り上げた時代の狂気をさすのではなく、「桃太郎」の変形の歴史では、戦時下であっても、鬼の降伏と謝罪によって敵対関係が解消され和解が成立する結末が用意されていたことこそ、人間のように善悪を併せ持つ両義的存在として鬼を捉える日本人の他者認識が投影されており、このことが敗戦後、鬼すなわち敵であった米国人を憎悪から熱愛の、忌避から畏怖の、侮蔑から崇拜の対象へと劇的に移行させ、「守護神」として歓迎した日本人の心性を読み解く鍵となるというのである。よって、「桃太郎パラダイム」は、敗戦を好機と捉え、占領期に米国の導きのもと平和で民主的な国造りに主体的に取り組もうとした日本人の「子どものように」素直で従順な、だが流動的で操作されやすい二面性の危うさの暗喩でもある¹⁴。

戦時期の「桃太郎」を戦争努力の遺物であると一律に断罪し歴史から断絶してしまわず、個々の表現に見られる変形の過程を丁寧に追跡することで、戦後との連続性を発掘しようとするダワーの方法論的態度は、「桃太郎」絵本の再話の歴史を「文化的象徴の継承性と新解釈」というキーワードで読み解こうとする森（2011）とも重なる¹⁵。森は、明治初期から戦前までの「桃太郎」絵本に通底するイデオロギー性と時代ごとの解釈の相違を列挙しながら、「桃太郎」の再話における社会的な意味生成のダイナミズムを把握しようとした。この二者の視点と研究手法は、占領期の「桃太郎」の解明の一助となりうると思われる。

（4）本研究の課題と方法

よって本研究では、占領期に出版された「桃太郎」のなかで29点と圧倒的多数を占めた絵本に焦点をあて、戦前の「桃太郎」絵本と比較対照することによって、占領期「桃太郎」絵本の再話の特徴や検閲体制下で出版が可能となった要因を探る。特にダワーと森に倣い、作品のなかで桃太郎や鬼がどのように表象されたか、敵対していた両者の関係性が結末でどのように変化するか、レトリックと視覚表現の分析を行い、戦前戦後の連続性と断続面を明らかにする。なお今回、プラング文庫所蔵の占領期「桃太郎」絵本と比較対照する戦前の絵本は、1937年大日本雄弁会講談社発行（以下講談社と略）「子供が良くなる 講談社の絵本 桃太郎」（文・松村武雄 絵・斎藤五百枝）と1944年講談社発行「コドモエバナシ新年号 ムカシバナシ モモタラウ」（文・千葉省三 絵・斎藤五百枝）に限る¹⁶。その理由は、戦前の「桃太郎」絵本を所蔵する公共図書館が少なく数も非常に限られ、当時の出版状況、編集方針、読者層とその受容実態を把握するのが極めて困難なのに対して、講談社の絵本は経営戦略の成功により、内務省の検閲制度下で

も大量の読者層を獲得し、桃太郎や鬼に対する読者の認識形成に強い影響力をもっていたこと、時局に際し昔話絵本は「日本精神」の発露を目的に「教育勅語」に基づく編集方針が取られていたこと、占領期の「桃太郎」絵本の多くが基本的には戦前の講談社の絵本の形式を踏襲し再構成されているからである。

3. 戦前の講談社の「桃太郎」絵本—絵本としての原型の成立—

成人から少年少女、幼年を対象とした「面白くて為になる」雑誌の発行で出版市場を席卷していた講談社が絵本創刊に乗り出すのは1936年12月である。就学前の読者層を新規開拓し、「勇気や親切心、同情心、孝行心、忠義の心、いろいろな特性を養ふ絵本」を毎月4冊同時発売することで、早い年齢から「皇道精神、愛国心」を持つ国民を育成することがその目的だった。一冊ごとに昔話が完結する単行本形式の絵本の発行は、翌1937年の1月1日の「桃太郎」から始まり、年内に「金太郎」「浦島太郎」「花咲爺」「猿蟹合戦」「一寸法師」「舌切雀」と続く。これら絵本の最大の魅力は、当時日本画壇で活躍していた一流画家によるリアリティあふれる挿絵と場面構成数の多さ、講談社という大資本ゆえに実現できた極彩色の美しい印刷であり、従来の絵本の概念を打ち破る画期的な試みとされた¹⁷。

1937年の「講談社の絵本 桃太郎（以下1937年版と略）」だが、例えば西田（2002）はその特徴を、勧善懲悪の展開だが残酷性はきわめて弱く、昔話の特徴である「一定の繰り返し」や「三段階の展開」を巧みに使った「表現のおもしろさ」は評価できるものの、松村武雄の文には「教育勅語」の影響がみられ、教訓臭く、特に結末で桃太郎が爺婆に対して鬼征伐の顛末を語った後、宮参りに行き動物に宝を分けてやる挿話は、「武勇を誇り、神道を崇拜し、戦争の功労を褒賞する当時の世相がはっきりでている」と松村の脚色に違和感を示す¹⁸。このように先行研究では「桃太郎」が取り上げられても、時代背景や講談社の編集方針と関連付け、該当する部分に焦点があてられることが多く、「桃太郎」の再話の歴史に講談社の昔話絵本を位置づける作業や内容に関する質的分析が十分になされているとは言い難い。

また従来全く顧みられる機会のなかった1944年の新年号「コドモエバナシ モモトラウ（以下 1944年版と略す）」は、「講談社の絵本」が203号をもって1942年4月に終刊したのち、その用紙配給の割当てを引き継ぐ形で1942年2月から1944年3月まで発行された「コドモエバナシ」の一冊である。この1944年版発行の目的は、絵本を読み聞かせられた日本中の子どもが桃太郎のように育つことを望む点では1937年の「講談社の絵本 桃太郎」と同じだが、1937年版が「桃の実のやうに、くるゝと太つて、丈夫で、力が強かったなら、どんなに人々から可愛がられ、尊ばれることでせう」と「人々から慕はれ、好かれる桃のような赤ちゃん」の誕生を求めるのに対し、1944年版では「桃太郎」で育っ

た「日本人、気はやさしくて力持ちの兵隊さんたちは、今はるかな海を超えて、日本国民の大理想をさまたげる米英の鬼を打ち懲してゐるのであります」と年頭にあたつての戦勝祈願にあった。

しかしながら以下では、このような「桃太郎」出版の背景にみられる政治的な意図や解釈論からいったん離れ、2冊を自律的なテキストとして読み比べ、その特徴を拾い上げてみよう。

表紙・挿絵はともに斎藤五百枝だが、1937年版の表紙は「桃印の鉢巻をして扇子を右手に握りしめた陣羽織の若武者が海を背景に正面よりやや右上に視線を向け立つ上半身」なのに対し、1944年版は「桃印の鉢巻をした陣羽織の若武者が右手を額にかざし海の彼方を見やる上半身」である。1944年版の表紙は、1937年版で鬼が島が近づき桃太郎が勇み立つ場面からきたものであろう。手の動きが加わることで「いざ出陣」の臨場感が伝わる。

桃を自ら割って飛び出し誕生した桃太郎は、「マルマルト フトッタ カハイイ ヲトコノコ」だが、その非凡さは1937版では誕生直後に直立し産湯入った盥を頭の上に持ちあげるほどの怪力であることから示されるのに対し、1944年版では盥の場面は削除され、鬼征伐に行くと言明する桃太郎を「ツヨイ カシコイ ニッポンダンジ」と讃え、鬼が島の門を正面からぶち破り、床に転がる込む鬼に右手を振り上げ挑みかかる場面で示される。

斎藤五百枝の描く鬼は酒吞童子を彷彿とさせ、二本の尖った角、ギョロリとむいた目玉、横に裂けた口に鋭い牙をもつ奇怪な形相と、腰に虎の皮をつけ毒々しく赤い筋骨隆々の裸体は、野蛮な残虐性が露である。その鬼を背後から組み付す桃太郎（1937版は右方向から、1944年版は左方向から）は口を真一文字に結んだ端正な美少年で、鬼との対照性が、清新と醜悪、理性と暴力、正義と悪を表すのに効果的である。背後では鬼の子分たちが犬・猿・雉の攻撃を受けひっくり返り、必死で逃げ惑う。揉み合い、縛れ合い、せめぎ合う力と力が詳細に描きこまれていることによって、争闘の激しさ、生々しさ、恐ろしさが絵本を手取る者に説得力を持って伝わり、桃太郎の最終的な勝利を確信させることになる。

1937年版では桃太郎は「ドウダ マダ ワルイコトラ スルキカ。スルナラ イノチヲトルゾ」と鬼を締めつけ脅し、次の頁では、両手をついて土下座した鬼が「モウ ケツシテ ワルイコトハ イタシマセン ドウカ イノチダケハ オタスケダサイ」と命乞いをし、「ココロヲ イレカヘタシルシニコレヲミンナ サシアゲマス」と改心の証に珊瑚、綾錦、金銀財宝、隠れ蓑、打ち出の小槌の宝を差出す。そして総勢30匹の鬼達は海辺に出て船で帰る桃太郎に手を振り見送り、それに対して桃太郎も日の丸の扇子を高く掲げて応える。1944年版は、見送りの場面は割愛されているが、陸路を凱旋する最後の場面に鬼が謝罪する言葉が直接話法で入る。敵対し合う強者が生命を賭けて激突し、

一方が他者をねじ伏せ従属させる、勝者の優越感や自己顕示と敗者の無念や屈辱が現実の戦争を想起させるほど鮮烈であっても、結末では、勝者は寛容な態度で敗者の謝罪を受け入れ、互いの領分を侵すことなく友好的に別れる場面が用意されているのを見逃すわけにはいかない。

4. 占領期の「桃太郎」絵本—講談社の絵本の継承と変形—

このような戦前の講談社の絵本の特徴を念頭に置いて、占領期の「桃太郎」絵本をみてみよう。谷（2006）の書誌的調査により、占領期の「桃太郎」絵本の概要は、表1の通り明らかにされている。以下では谷作成の番号表記を用いて、作品分析を行いたい¹⁹。

一見する通り、「桃太郎」29冊はどれも絵本とはいえ非常に頁数が少ない。12頁だと表紙・裏表紙を除くと10頁で見開きにすると最低5場面、16頁だと見開きで最低7場面構成となる。よって、桃寄せ、桃太郎の誕生、成長と出征、犬猿雉との団結、船出、鬼が島での鬼退治、鬼の謝罪、宝物を得て凱旋という標準的な流れすべてに1頁ずつ振り当て絵と文を入れることは物理的に難しい。限られた紙面がどのように構成されているか戦前と比較し、どこの表現に変更や新解釈がみられるかが占領期の再話を読み解くポイントとなる。

ところで、GHQ・SCAPは占領統治を円滑に進める上で、人々が戦前の封建的な皇道精神や愛国主義に逆戻りして米国に敵愾心や怨恨を抱き、復讐や暴力行為、戦争を容認する空気生まれることを警戒し、検閲制度を設けて密かに思想統制を行っていたのは前述した通りである。だが、谷が北海道で発見したように、「桃太郎」の紙芝居が「軍国主義的なテーマをベースにした日本の昔話」であることを理由に「違反」「右翼の宣伝」の処分を受けていたとするならば、なぜ「桃太郎」絵本は処分を逃れたのだろうか。例えば、五大昔話のひとつである「猿蟹合戦」は、占領期では「合戦」という言葉が絵本の題名から削除され「さるかに」で流通している。「合戦」はあからさまに武力衝突を意味するため、何らかの形で規制が働いたとも想像される。では、鬼退治は問題なかったのだろうか。

（1）イデオロギーへの拘泥—平和愛好と民主主義国家建設—

占領期の「桃太郎」絵本29冊を概観する限り、桃太郎が鬼が島に行くのは、鬼を「たいじ」（①⑥⑦⑪⑫⑭⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）、「せいばつ」（③⑨⑬⑮⑯㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）あるいは「こらしめる／こらす」（④⑤⑧⑩⑫⑭⑲㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）ためと明記され、「退治」、「征伐」、「懲罰」という表現は検閲の改変削除の対象にはなっていないようである。また、鬼の「退治」「征伐」「懲罰」の理由を触れていないのが多いが、一方で「悪い」鬼を懲らしめ、「弱い者いじめ」をなくし、村の「平和」や「楽しい国」を作るためと合理的な説明がなされているのが

表1 プランゲ文庫所蔵「桃太郎絵本」一覧 谷暎子(2006)作成 p.55より一部抜粋

	書名	文	挿絵	頁数	出版社	出版年月日	出版部数
①	もも太郎	土家由岐雄	藤沢龍雄	12	日の出書房	1947.04.15	
②	桃太郎	下村富泰		12	永光社	1947.10.30	
③	ももたろう	林義雄		16	二葉書房	1947.11.05	
④	ももたろう	葉山涼村	井上たけし	16	有美社	1948.01.25	
⑤	ももたろう	柴崎優介	小山泰治	16	大川屋書店	1948.02.05	
⑥	ももたろう (⑤再版)	柴崎優介	小山泰治	16	大川屋書店	1948.04.25	10,000
⑦	ももたろう	浦賀司郎	小山泰治	12	二葉書房	1948.05.10	
⑧	もも太郎		藤沢龍雄	12	グリム館	1948.07.15	10,000
⑨	桃太郎 (③再版)	風間四郎装幀 林義雄		16	二葉書房	1948.09.01	
⑩	桃太郎	比良凡二		12	錦城社	1948.10.01	
⑪	桃太郎	柴野民三	新井五郎	20	春江堂	1948.10.25	10,000
⑫	ももたろう	村松たけお	岩崎良信	12	とんぼ社	1948.10.25	3,000
⑬	ももたろう	西田稔	吉田忠雄	16	児童図書出版社	1948.12.05	10,000
⑭	桃太郎	さちひこ		12	幸文堂書房	1948.12.10	
⑮	桃太郎	高木四郎	Hajime	12	光洋出版	1949.01.20	
⑯	ももたろう	二反長半	鈴木としお	12	文祥堂	1949.01.20	15,000
⑰	桃太郎	藤沢龍雄		12	さかえ書房	1949.02.05	5,000
⑱	ももたろう	牧山泉	千草明二	16	言海社	1949.04.05	8,000
⑲	ももたろう	美保優	渡辺優	12	青樹社	1949.04.10	8,000
⑳	桃太郎		豊国亮	16	榎本書店	1949.05.10	20,000
㉑	ももたろう	川島赤陽		12	永光社	1949.05.20	5,000
㉒	桃太郎さん	下田喜代子	にしつせいじ	12	冒険講談社	1949.05.20	5,000
㉓	ももたろう	〔コヤマタイジ〕		12	二葉書房	1949.06.01	10,000
㉔	桃太郎	川島哲		12	光育社	1949.06.05	5,000
㉕	桃太郎		横田ただし	12	二葉書房	1949.06.15	10,000
㉖	ももたろう	〔コヤマタイジ〕		12	鷗友社	1949.08.20	5,000
㉗	ももたろう	奈街三郎	大森ゆみまろ	12	新子供社	1949.09.01	10,000
㉘	ももたろう	土家由岐雄	柿原輝行	12	永晃社	1949.09.15	5,000
㉙	桃太郎		黒崎義介	12	富士屋書店	1949.09.10	10,000

以下である。

例えば、占領期に出た「桃太郎」絵本の最初の作品①で土家由岐雄は、桃太郎の七五三の祝いに宮参りに行く途上、子どもをさらい宝を盗み、町の祭りに騒動を起こす鬼をみて、「ひとを いじめる わるい おに むらを こまらす わるい おに きょうは たいじに いく ひです」と出立を決意し、桃太郎のおかげで「むらは へいわに なりました」と結ぶ。⑩で比良凡二は、桃太郎を「へいわのくに」の建設の使者であることを明確にし、「りっぱにおおきくなった ももたらうは へいわをみだす わるものを こらしめにいくことになり」、「へいわなくにを つくろうとおもつて おともをした いぬ、さる、きじ、は ももたらうから おだんごを いただき」、「わるもののしまについたので ちからをあわせて こらしめました それから たのしいへいわなくにになりました」とあるよう、「平和の国」の幟を揚げさせる。また⑤で柴崎優介は「わるい おにども こらしめて たのしい おくにを つくろうと いさんで いえをでかけます」、そして「わるい おにたち こらしめて たのしい おくにに になりました」と「楽しい国」を理想に掲げる。なかには⑯の二反長半のように「ももたろうさん ももたろうさん おにがしまに おに がいて よわいものを いじめます どうぞたすけて くださいな きじ いぬ さるが たのみます」と動物達の要請があり桃太郎は鬼退治に行ったのであり、その結果「おおきなおにが ぼたぼたと なみだをながして あやまった これから みんなと てをつなぎ なかよく たのしく くらします」と改心した鬼と「手をつなぎ」、「仲良く楽しい暮らし」が実現したとするものもある。⑳の裏表紙には、「みんなあかるく みんななかよし」の標語が載せられ、桃太郎には「仲良し」という教訓が新たに加わる。

⑮の光洋出版のみが「お母さま方へ」で出版の趣旨を明確にしており、「新時代の流れとともに、すべてのものは勿論、幼児の想像力も、思考力も進歩しなければなりません。その点進化的な意味において旧桃太郎を排し、飛躍的に斬新なる桃太郎を出現させてみました。その内容に於いても、平和愛好を表明し、面白く且つデモクラシーの趣旨を徹底させ、高木画伯の力作とともに、一層の光彩を放っていると自負しています。」と、「桃太郎」は「平和愛好」と「デモクラシー」を説く教材へと様変わりする。

桃太郎の鬼退治は、「平和で明るく楽しい国」を建設するためのものだという主張は、武力や戦争を肯定する軍国主義と対極にあるかのような錯覚を生むが、時代が理想とする国家像にいち早く「桃太郎」を適合させようとした点では、戦前に通ずる。「桃太郎」に人心を鼓舞し、未来に希望を持たせる単純明快なイデオロギーを付与する再話の手法は、完全に断ち切られていないともいえる。

(2) 桃太郎イメージの刷新—「かわいい」化—

戦前との連続性はイメージ戦略にもうかがえる。29冊を並べるとどれも似たような印

象を与えるだけでなく、戦前の講談社の絵本の「形式」を踏襲していることに気づかされる。1冊40万部ともいわれる驚異的な発行部数を誇り、昔話絵本出版の確かな実績を持つ講談社の「形式」を他の出版社が真似たのは、その高い知名度や信頼感を借り売り上げを伸ばす手っ取り早い手段であったとともに、昔話に対する固定したイメージを裏切ることなく、読者に新しいメッセージを届けるのを容易にすると考えられたためではなかろうか。

29冊の表紙は、「桃印の鉢巻をした陣羽織の若武者が正面よりやや右上に視線を向け立つ」上半身や顔のアップが多くを占め、右手には日の丸の扇子や「日本一」の幟が握られているか、額にかざし彼方を見やるかで、着物の模様や脇に従える動物、幟など細部が異なる。ただし、講談社の絵本と決定的に違う傾向として、主人公の桃太郎が、姿は若武者だが顔や体形は優しく丸みを帯びたものが多く、黒目を強調した表情が幼い印象を与え、戦闘に挑む緊張感や勇猛さ、剛健さを感じさせない点である。特に際立つのは、二葉書房が1948年8月に再版した表紙で、林義雄による1947年版を風間四郎の装幀で一新したもののだが、目尻をさげ白い歯を見せて朗らかに笑う3～4歳の男児の上半身が下方から描かれ、写実的だがその体温や笑い声まで伝わるような柔らかい筆致である。桃太郎のイメージは、子どもが背伸びをして憧れる若者ではなく読者と等身大の子どもへと、強健な心身で国の命運を担うべく選ばれた特別な存在ではなく、親しみやすい身近な存在へと変化する。

桃太郎は単に低年齢化、幼児化したのではなく、愛すべき「かわいい」存在であることを強烈にアピールしているのは表紙だけではない。桃太郎の人物像に関する記述は、戦前にみられた「つよい」(④⑧)「つよくてかしこい」(③⑨②③)、「つよくてやさしい」(②①)「つよくてやさしいげんき」(⑬)あるいは文部省唱歌にあった通り「きはやさしくてちからもち」(⑦⑫)「こころやさしくちからもち」(②⑥)「ちからもち」(②⑩)「ちからのつよい」(⑮)に加えて、「げんき」(⑩)「すすくそだった」(⑮②⑥)「びょうきもしない けがもない すくすくそだった」(①②⑧)、「すすくそだってちからもち」(⑤)「すすくそだったももたろうは きはやさしくてちからもち」(⑮)とその健やかさが強調される。さらに、誕生時より「かわいい」(②⑪⑫②⑤②⑨)「かわいいかわいい」(③⑨②③②④)「ふとってげんきなかわいい」(⑮)と「かわいさ」に特別な意味が持たされる。

講談社の絵本では、1937年版では「マルマルト フトッタ カハイイ ヲトコノコ」、1944年版も「マルマルト フトッタ ヲトコノコ」だったが、文と絵の表現は異なり、誕生時より大人の体型の縮小型として描かれ、頁をめくるたびに成長して出征時には若者の姿になっていくのに対し、占領期の絵本の多くは、幼児体型のままで、筋書きに反して絵では成熟の過程が余り見られない。

極端な例だが、②⑦の桃太郎は「ももをひろってかえったら ぱくりとわれて ばんざいと ももから うまれた ももたろう おばあさんも にーこにーこ おじいさんも

に「ここに」と誕生が笑顔で祝福され、鬼が島にはおやつを持ってまるでピクニックに行くかのように軽い気分で「いぬくん さるくん みな おいで きじくんも とんでおいで これから いこうよ おにがしま おなかですいたら きびだんご たべたべいこうよ おにがしま」と行き、「きじは つつくし さるは ひっかくし いぬは かみつくし そして ももたろうもつよいから おにのたいしょうは ごめんごめんとあやまった」と簡単に鬼を屈服させ、宝物を牽いて凱旋する場面では「『みんなつかれたら おやすみよ ほくが ひとりで ひくからね』 つよくて やさしい ももたろうこれから おうちへ かえるの です」と、まるで「ごっこ遊び」の世界のように夢想的である。

ここには、異界から流れ着き桃の霊力を秘めるがゆえに、暴力の限りを尽くす極悪非道の鬼どもをたった一人で打ち負かすことのできる怪童のイメージや戦地に赴く武将のイメージが払拭され、元気いっぱいに育ち誰からも好かれる無垢な子どものイメージが前面に出されている。桃太郎の「かわいい」化によって、陣羽織をつけ日の丸の扇子を掲げ「日本一」の幟を立て鬼退治に臨む「お馴染みの」「懐かしい」桃太郎像を壊さず、一方で占領軍に反する封建的な若者ではなく、昔話の世界に遊ぶ「無害な」子どもとして蘇っている。では、「かわいい」桃太郎が鬼退治できるよう再話ではどのように説得力を持たせたのだろうか。

(3)「戦争のリアリティ」からの離脱—去勢される鬼と戯画化される戦闘—

鬼退治の場面では、斎藤五百枝の挿絵の模倣が13点みられる。そこでは、鬼の顔や表情、背景の描写に工夫があるとはいえ、基調は「腹ばいになった鬼を桃太郎が背後から組み伏す」で1937年版の構図を借りたのが多いが（④⑧⑫⑬⑰⑱⑳㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣

一方、講談社絵本にはない構図で鬼退治の描写が独自になされている場合、以下の4つに分類できる。すなわち、A.そもそも鬼退治、鬼の謝罪、宝物を得て凱旋の頁がない(②⑩)、B.鬼退治の頁はなく、鬼が島に向かった次の場面では、鬼が謝罪する文と絵がくる(①③⑨②⑩⑪)、C.鬼退治の場面はあるが、鬼が無様に負かされ平謝りする(⑪⑭⑱②④②⑨)、D.鬼は最初から戦う意志がないようで、桃太郎から逃げる(⑬②②②⑦)となる。

Aでは、②鬼が島に船出する絵と文で突然終わる、⑩鬼が島に上陸する場面の絵に「わるもののしまについたので みんなはちからをあわせて こらしめました そこからのしいへいわにくになりました」と完結する。②は事前検閲期の出版にあたるため、

改変削除の処分が出た結果とも考えられるが、現段階ではその不自然さを解明するための資料がない。検閲の直接的な結果か、検閲基準を付度して自主的に鬼退治の場面以降を割愛したのか、それとも「戦いの場面は描きたくない」という思いが絵本制作者側にあったのか、今後精査していく必要がある。同じことは、戦わずして鬼が謝るBでも考えられる。

Bでは、①の犬・猿・雉が「おおいさ」すると書かれているが、桃太郎が何をしたかは明確に触れられず、土下座して謝る鬼を見下ろす桃太郎、③は鬼が島の鬼が油断し居眠りしていたために容易に上陸でき、次の場面で大きな鬼が両手をついてうなだれ謝る、⑳㉑も戦闘場面は省略され、宝を差し出し降参する鬼を見守る桃太郎が描かれる。

Cでは、⑪あきらめたかのように目をつぶって力なく地面に倒れる鬼、⑭仰向けにひっくり返ってしまい、馬乗りになった小さな桃太郎にのど元を押さえ込まれ、猿に金棒を押さえ込まれ犬に指をかまれる鬼、⑮石を投げつけられようとして、腰砕けになり命ごいをする鬼、⑯紙面中央にお尻を向け九の字の折れて倒れ込む鬼、⑰背負い投げをされ宙を舞う鬼と腰を抜かして逃げようとする鬼が描かれる。

Dで顕著なのは、⑱鬼が見るからに弱々しく情けなくもはや敵ではないことが歴然としているだけでなく㉒㉓桃太郎が幼稚で刀を振り回すポーズを取っているものの、表情や動きの描線が太く単純化されているため、漫画のようで滑稽ささえ漂う。

BからDに共通して言えるのは、大きな鬼を桃太郎は苦も無く一瞬にして倒すか、あるいは戦わずして勝利を得ることと、鬼がすぐに謝る点である。このことは、先に述べた桃太郎の「かわいい」化と無関係ではないように思われる。つまり、子どもの姿の桃太郎が鬼を倒すことができるようにするためには、鬼は強そうに見えても実は弱いのか、そもそも戦う気がないか、すぐに改心する素直な鬼に仕立て上げなければ、つじつまが合わない。そうなると戦闘場面も、講談社の絵本にあった迫力やスピード感あふれるリアルな描写より、虚構の出来事だとわかるよう戯画的に誇張された方が説得力を持つことになる。

一方、占領期の「桃太郎」絵本のユニークさは、鬼の謝罪場面にこそ画家の個性が発揮されているのではないかとと思われるほど、鬼と桃太郎の表情が豊かに描きこまれている点にある。「ごめん、ごめん」「もう わるいことは いたしません」と手をついてうなだれる大きな鬼とその姿を見守る桃太郎の小ささを巧みに対比させる数々の描写に共通するのは、登場人物は皆「善」であることによる勧善懲悪の図式の崩れと、「悪いことをしたら謝るべき」で「謝れば許してもらえ／許してあげる」という「優しさ」の道德である。主人公に自己投影しながら昔話を聴く幼児のしつけに考慮した再話といえよう。

5. 占領期の表象戦略

以上、占領期の「桃太郎」絵本29冊を戦前に出版された講談社の「桃太郎」絵本と比較し、作品のなかで桃太郎や鬼がどのように表象されたか、敵対していた両者の関係性が結末でどのように変化するか、レトリックと視覚表現の分析を行い、再話の歴史における戦前戦後の連続性と断続面を探究してきた。占領期の「桃太郎」絵本は、講談社の「桃太郎」絵本の「形式」を踏襲しているものが多く、その内容は軍国主義的な発想から脱却しているようにみえるが、平和や民主主義など時代が掲げる政治理念に適合させようとする再話手法が一部で継承されていた。また表紙や挿絵では、斎藤五百枝の構図や表現の模倣が積極的なされる一方、桃太郎の姿態や表情、言説が愛くるしく健康的で明朗な幼児へと一新し、読者と等身大の親しみやすい存在に近づき、生得的な力を持つ異類の出自や国家が理想とする強健な心身の武将としての桃太郎像は薄まる。鬼も残虐非道の邪悪な存在ではなく、桃太郎に簡単に屈する「弱者」に変わりうることが戦闘場面の描写から明らかとなった。さらに、鬼の謝罪と桃太郎の寛容で迎える結末の和解は講談社の絵本にも既に用意されていたものだが、占領期に顕著な傾向として、劇的な緊張や変化を伴わずに桃太郎が大きな鬼を改心させ、最後はともに「善」なる存在として寄り添う「優しさ」が見られた。これらは、販売戦略の成功により絵本「桃太郎」の原型を作り上げ、桃太郎に対する戦前の人々の感性や認識を強く枠づけた講談社の絵本との比較において浮かび上がってきた点に過ぎないが、イデオロギーへの拘泥、桃太郎イメージの「かわいい」化、鬼の去勢化、戦闘の虚構化と戯画化による「戦争のリアリティ」からの離脱を、占領期の「桃太郎」絵本の再話にみられる表象戦略としたい。

先行研究で強調されてきた戦後の「桃太郎」出版における贖罪意識の有無については、絵本分析に限れば、現段階では不明である。よって、今後の作業として、戦前に活躍した作家の占領期の創作意識、講談社以外の戦前の絵本との比較、出版社の編集方針の変更などから精査したい。その際有力な手がかりとなるのは、講談社の動向である。講談社は、占領期に新興出版社による模倣品が普及するなか昔話絵本の復刊を「桃太郎」のみ見送り、検閲制度終了後の1950年に1937年版と同じ斎藤五百枝・松村武雄で出版するが、「桃太郎」の魅力や意義を紹介する文章からは戦前の立場を180度転換させていることがわかる²⁰。また、今回は分析の対象から外したが、プランゲ文庫所蔵の占領期「桃太郎」漫画2本、児童書2本では、極めて大胆な翻案が意識的になされている例も見られる。いずれにせよ、戦前の講談社の「形式」を要領よく借りた占領期の「桃太郎」絵本は、「古い革袋に新しい酒を入れる」かの如く「なし崩しの」に再出発したものだったのか否か、さらなる解明が急がれよう。

また、検閲制度が及ぼした影響についても不明瞭な点が多い。現実の戦争を想起させ

るような生々しく具体的な描写や軍国主義下の常套句が再話から取り除かれたのは、検閲の圧力による自主規制が働いたためか、戦後しばらくの間多くの人々が抱いたとされる武力闘争の悲惨さやイデオロギーの欺瞞性に対する嫌悪感のためか、戦後の新体制において「子ども」の心理と教育への配慮が強く求められたためか、幼児に的を絞った絵本という表現媒体そのものに起因するものか、関連性を実証できる史資料を一から探索する必要がある。

さて、ダワーが「桃太郎パラダイム」から示唆した通り、「桃太郎」の変形過程から、戦前戦後の日本人の心性を読み解くことは可能だろうか。親から愛され健やかに育った子どもこそが、邪悪を正し秩序と平和をもたらすという、救世主としての桃太郎像は、「桃太郎」の再話の歴史に連綿と流れてきたものだが、それは変わらず占領期にも引き継がれていた。ただし、桃太郎が「子どもであること」それ自体に価値が見出されている点に注目すべきだろう。つまり、鬼の隠れた「善性」は「子ども」のような桃太郎を前にしてこそ発露するものであり、ここでは「強い」桃太郎が「強い」鬼を倒す話に喝采するという過去の図式が壊されている。まともに戦わずして鬼退治を果たす「かわいい」桃太郎と、すぐに負ける弱い鬼が主流の占領期の「桃太郎」絵本は、「毒にも薬にもならない無益無害」と批難もされよう²¹。しかし、戦前まで桃太郎は「勝つ」ことに焦点が当てられていたのに対し、占領期は桃太郎が「負けない」ことに意味があったといえないだろうか。大人が敗北に打ちひしがれた時代にあって、「子ども」の前途には生命を脅かす困難も危険もない、何があっても負けることはなく、鬼は謝り宝物は返る、という予定調和の安定感が絵本を手取る人々を勇気づけ希望を与えたとも思われる。そうになると、挿絵の独創的な表現が様々に光る結末の謝罪場面、すなわち「土下座」という日本独特の礼法で屈辱的なまでに「子ども」の桃太郎への敬意と恭順を表す鬼の姿に、戦前の「鬼畜米英」の表象であった鬼ではなく、当時の日本の大人世代の現実を重ね合わせられないだろうか。桃太郎に代表される「子ども」世代に対して、大人世代が日本再生を託す「世代交代の話」として「桃太郎」を読み替えることもできそうだ。占領期という転換期にあって、「桃太郎」の絵本は、「子ども」という存在のもつ潜在的な可能性を人々が再認識するためにも求められたのかもしれない。

追記

戦前および占領期絵本の表象戦略をテーマとする本研究では、本来、論を展開していく上で根拠資料となる絵本の挿絵を具体的に示し実証することが不可欠であるが、学術目的であっても絵本の一部（挿絵と文が一体となっている頁）を刊行物等に「転載」する場合、著作権者から許諾を得る必要があるとされる。（なお、絵本の文のみの場合は、著作権法32条「公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の

引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない。」の「引用」にあたる。) 今回、挿絵の「転載」を検討した何点かの絵本は、占領期に新興した小規模な出版社によるもので、もはやそれら出版社は現存しておらず、また挿絵画家の実名や没年、所在に関しても不明な点が多く、このように著作権保護期間が満了しているか否か確認が取れない場合は「著作権保障期間」にあたるとみなされる。2016年1月の段階で、挿絵の著作権者および著作権継承者について正確な情報を収集できず、「転載」の許諾を得る手続きが難航しているため、残念ながら根拠資料の「転載」を見送らざるを得なかった。今後も著作権者に関する情報収集に努めるとともに、現行の著作権法において学術目的での絵本の挿絵の「引用」が可能となる方法がないものかどうか検討したい。

注

* 本研究では、昔話としての桃太郎を意味する場合は「桃太郎」と、登場人物としての桃太郎を指す場合には鍵括弧なしで桃太郎と表記する。

- 1 巖谷小波(1894)『日本昔噺 第一篇 桃太郎』博文館、巖谷小波(1915)『桃太郎主義の教育』東京堂書房、柳田国男(1942)『桃太郎の誕生』三省堂、林太良(1974)「英雄伝説桃太郎新論」『日本神話伝説の研究2』平凡社東洋文庫 pp.183-206、滑川道夫(1981)『桃太郎像の変容』東京書籍、鳥越信(1983→2004)『桃太郎の運命』NHK出版→ミネルヴァ書房、吉野裕子(1983)『陰陽五行と日本の民俗』人文書院 pp.224-228、黒田日出男(1993)「異界の子どもと近世の子ども」江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもたち』くもん出版 pp.216-222、稲田浩二ほか編(1994)『日本昔話事典』弘文堂〈ももたろう〉pp.962-963、野村純一(2000)『新・桃太郎の誕生—日本の「桃ノ子太郎」たち(歴史文化ライブラリー)—』吉川弘文館、岡山県立美術館編(2007)『描かれた「桃太郎」展』パンフレット、保立道久(2013)『物語の中世』講談社学術文庫などを参照
- 2 滑川(1981)、鳥越(1983→2004)、鈴木重三・木村八重子編(1993)『近世子どもの絵本集 江戸篇』岩波書店、中野三敏・肥田皓三編(1993)『近世子どもの絵本集 上方篇』岩波書店、唐沢富太郎(2010)『図説明治百年の児童史 上・下』日本図書センター
- 3 窪田美鈴「「桃太郎」絵本における視覚表現の変遷」鳥超信編著(2002)『はじめて学ぶ 日本の絵本史 I』ミネルヴァ書房 pp.207-223
- 4 滑川道夫(1981)序 vi pp.199-205, pp.312-316, pp.339-340, pp.377-397, pp.532-53, 鳥越信(2004) pp.115-132, pp.133-136、加原奈穂子(2010)「昔話の主人公から国家の象徴へ—「桃太郎」パラダイムの形成—」『東京藝術大学音楽学部紀要』36号 pp.51-72
- 5 山本利武(1996)『占領期メディア分析』法政大学出版局 岩波書店、吉見俊哉(2007)『親米と反米—戦後日本の政治的無意識—』岩波書店 pp.81-87、小林聡明(2007)『在日朝鮮人のメディア空間』風響社、佐藤卓巳(2008)『輿論と世論』新潮社 pp.74-99、山本利武(2013)『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』岩波書店、日高昭二(2015)『占領空間のなかの文学—痕跡・寓意・差異』岩波書店などを参照
- 6 山本(2013)附録 p.6、江藤淳(1994)『閉された言語空間—占領軍の検閲と戦後日本』文

- 春文庫 pp.236-242
- 7 John W.Dower(1999)*Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*, W. W. Norton, pp.405-440 (ジョン・ダワー (2004)『敗北を抱きしめて 増補版 下』岩波書店 pp.175-227) 山本 (2013) pp.63-88, pp.127-193
 - 8 Gordon W. Prange Collection www.lib.umd.edu/prange ニチマイ (2000)『メリーランド大学所蔵メリーランド大学所蔵 プランゲ文庫記念図録』ニチマイ
 - 9 谷咲子 (2000)「プランゲ文庫に見る占領期の児童出版物—1945年-1949年—」〈プランゲ文庫〉展記録編集委員会編『占領期の言論・出版と文化—〈プランゲ文庫〉展・シンポジウムの記録』早稲田大学・立命館大学 pp.188-209, 早稲田大学「占領期の子ども文化〈1945-1949〉展実施委員会」編 (2001)『占領下の子ども文化〈1945-1949〉—メリーランド大学所蔵・プランゲ文庫「村上コレクション」に探る—』ニチマイ, 谷咲子 (2002)「占領下の絵本と検閲」鳥越信編著 (2002)『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』pp.17-35, 谷咲子 (2004)『占領下の児童書検閲 資料編—プランゲ文庫・児童読み物に探る』新読書社, 村上寿世・谷咲子 (2005)『ゴードン・W・プランゲ文庫児童書目録』文生書院, 相川美恵子 (2012)「二つの言論統制 GHQと内務省」鳥越信編著『日本の戦争児童文化史』ミネルヴァ書房 pp.89-99
 - 10 谷咲子 (2006)「占領下に出版された「桃太郎」をめぐって—プランゲ文庫所蔵絵本を中心に—」絵本学会編『絵本学』第八巻 pp. 47-60
 - 11 大藤幹夫 (1980)「昭和20年代の「ももたろう」絵本」大阪学芸大学国語国文学研究室編『学大国分』第23巻 pp.19-38
 - 12 John W. Dower (1986)*War without Mercy: Race and Power in the Pacific War* Pantheon (ジョン・ダワー (2001)『容赦なき戦争—太平洋戦争における人種差別—』平凡社ライブラリー pp.394-435)
 - 13 John W. Dower (1986)“*Momotaro paradigm*”p.251 邦訳 p.420
 - 14 ダワー (2001) pp.482-519
 - 15 森覚 (2011)「絵本がつくる社会と政治 時代による解釈の変遷」中川素子ほか編『絵本の事典』朝倉書店 pp.547-549
 - 16 国際子ども図書館デジタルコレクション所収
 - 17 阿部紀子 (2002)「講談社の絵本の功罪」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本の絵本史〈2〉15年戦争下の絵本ミネルヴァ』書房 pp.122-141, 阿部紀子 (2011)『「子供が良くなる講談社の絵本」の研究—解説と細目データベース』風間書房
 - 18 西田良子 (2002)「講談社の絵本—昔話—」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本の絵本史〈2〉15年戦争下の絵本ミネルヴァ』書房 pp.154-165
 - 19 谷 (2006) p.55より一部抜粋 (紙幅の都合で検閲情報等を除いた)
 - 20 講談社「桃太郎」1950年版の裏表紙「桃太郎について」で松村武雄は,「『桃太郎』は, 内容が, いかににも尚武的で, しかもむやみにただけしい, 好戦的な気分はもっていない, 気がやさしくて, 弱い者の苦しみを思いやって, 強くてよこしまな者をくじくところに, 任侠の尊い精神が, 明るくみなぎっており, その点からいって, おのずと男の子にいい読み物となっています。」「全体の色調が, いかににも明朗で, しかもロマンチックで, 子供のお話になりきっています。そこにわが『桃太郎』のすぐれた価値があります。」とする。また, 講談社年齢別絵本「ももたろう」1957年版の「おかあさま手帳」の解説で神戸淳吉は,

「ももたろう」には、「教訓らしいものは、まったくといってよいほど、はいっておりません。あかるくて、豪快で、その上、筋も単純で、幼い子供たちに、すなおにうけいられる典型的な、昔話であります。」また「ご承知のように、気だてのやさしい、力もちの、平和を好む快男子であります。それが周辺の国々をあらず鬼をやむなく退治いたしますが、けっして、好戦的な人物でないことは、申すまでもありません。」と戦前の「桃太郎」の読まれ方や桃太郎イメージとは正反対の見解を示している。

21 鳥越（2004）p.155

謝辞

なお、本稿執筆にあたり、2015年6月～7月に「桃太郎」絵本をはじめ占領期に出版された児童書等の歴史調査をメリーランド大学カレッジパーク校ホーンバイク図書館プラング文庫にて行った。その際、同文庫室長 巽由佳子氏および文庫マネージャー Amy Wasserstrom氏、文庫コーディネーター Kana Jenkins氏に多くの協力や示唆を賜った。ここに感謝の意を表したい。

すとう みかこ（児童文学論・子ども観の比較社会史）